

出土漆製品を顕微鏡で観察する

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



京都市内より出土した漆製品

はじめに

わが国における漆製品の起源はまだ完全には解明されていないが、考古学的には福井県の鳥浜遺跡^{とりはま}や山形県の押出遺跡^{おんだし}から出土した優秀な漆製品によって、すでに縄文時代の前期にはかなり広範囲に使用されていたらしいことが知られている。縄文時代の漆製品は木製品や土器などに装飾として塗られたものが中心で、最近の漆膜断面の自然科学的研究によって、漆が何層にも塗られ、大変精巧に作られた製品が多いことが明らかになっている。

京都市内からはまだ縄文時代にさかのぼるような古い時代の漆製品は出土していない。しかし歴史時代になると、京都市周辺が、長岡京・平安京・鳥羽離宮など1200年にもわたって歴史の表舞台と

なった土地柄であり、各時代に使用された漆製品の出土資料は豊富である。ただ、出土する漆製品が完全な形を保って出土することはごくまれで、大部分は破片の状態で出土する。ここでは、出土漆製品の破片から漆膜や素地のほんの一部を取り出して顕微鏡で断面を観察し、製作技法についての情報を得る方法を紹介してみよう。

断面観察は、伝世する貴重な漆製品ではなかなかゆるされない研究方法である。京都の各時代におよぶ出土漆製品を調査することにより、限られた時代の漆製品しか出土しなかったり、出土量に限りのある他地域ではとても得られない貴重なデータが得られるものと思われる。しかも、出土品は日常的に使用されていたものが多く、優品が中心の伝世品とはちがった

生産のされかたをしていた可能性もあり、伝世品を中心に語られることが多い日本の漆工技術に新しい知見を加えることができるのではないかと考えている。

出土漆製品の内容

ここで、具体的な観察例を紹介するまえに、京都市域から出土する漆製品の内容について概観しておこう。

現代の日常生活では、漆製品の代表的なものとして碗や重箱をまず第一に連想するが、出土した漆製品の内容は実に多様である。食器として用いられた碗皿類が各時代を通して最も多くの出土割合を占めることはもちろんであるが、それ以外にも長岡京跡からは麻布[？]に漆を塗ったものや、漆の貯蔵に使用された紙が出土している。平安京跡からは漆で装飾した硯・漆塗りの烏帽子^{えぼし}・漆を入れた桶や土器が出土している。鳥羽離宮跡からは仏像や須弥壇^{しゆみだん}の一部と思われる漆膜の破片をはじめ、漆塗りの武具が出土している。また桃山時代には聚楽第遺跡周辺や伏見城跡からは接着剤として漆を使用した金箔瓦が大量に出土している。さらに、御土居^{おどい}の外濠からは江戸時代の多量の碗類とともに漆を盛り上げた将棋の駒(王将・銀将)も出土している。

漆製品の顕微鏡標本(プレパラ

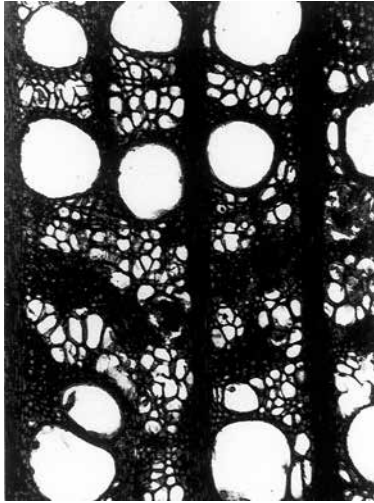


写真1 ケヤキ 木口

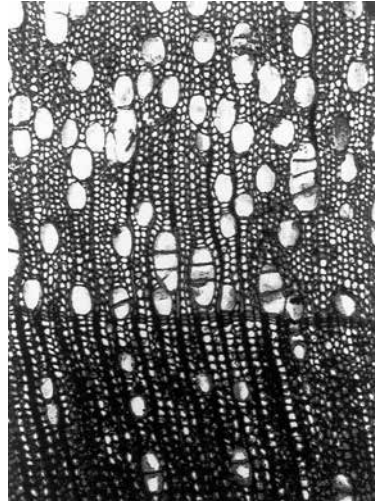


写真2 トチノキ 木口

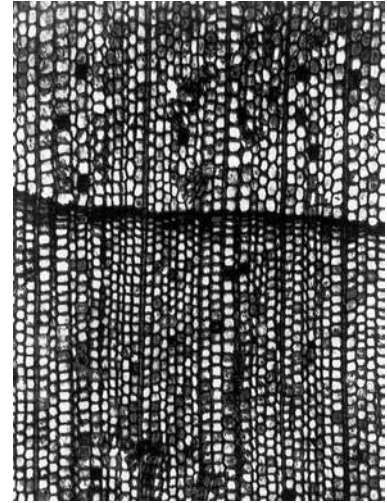


写真3 ヒノキ 木口

ト) のつくりかた

出土漆製品の顕微鏡観察の対象は、主に素地と漆膜であり、椀や皿などの木製の素地（木胎）については、出土してまだ水漬けの時に破片の断面から安全カミソリで木口・^{まごめ} 柾目・^{いため} 板目の切片を採り、顕微鏡で観察して現世標本や文献と照合して樹種を確認する。

漆製品の漆膜断面を観察する方法にはいくつかあるが、ここでは出土品からごく微小な漆膜（数mm角）を採取して薄片標本を作る方法を紹介する。工程はおおよそ以下のとおりである。

- (1) 漆製品から漆膜を採取してエポキシ樹脂などの合成樹脂にうめる。
- (2) 観察したい面を研磨粉で研いで削りだす。
- (3) 観察したい面をスライドガラスに貼り着ける。
- (4) 観察したい面が顕微鏡で観察できる厚さ（20 μ m程度）になるまで裏側を研磨粉で研いで削りだす。

以上の工程をへて、観察したい漆製品の断面の標本ができあがる。

漆膜の断面観察で重要な点はいくつかあるが、重要なのは下地の構造が十分観察できること、発色に必要な顔料として何が混ざっているかある程度推定できることである。標本の厚さはその観察が十分行なえることが要求される。また、個々の製品について1点だけの標本では正確な観察ができなかったり、研ぎだしに失敗して消失するおそれもあるので、原則として1資料につき複数、個々の標本を作成するように心がけている。

木製漆製品の樹種

各時代を通じて最も出土量が多いのは椀などの食器類で、素地は木質である。まず出土した木製漆製品にどんな種類が見られるのか、樹種を顕微鏡で観察してみよう。

写真1はケヤキの木口面の写真である。大きな導管が環状に並ぶのが特徴で、堅くひずみの少ない木で、ろくろで挽いて椀・皿・蓋・器台などを作りだしている。平安時代前期の木製漆製品のほとんどは素地がケヤキ材からなる。鳥羽離宮跡出土の木製漆製品にもケヤキ材は多く見られるが、時代が新

しくなり、江戸時代初期の御土居の外濠ではケヤキ材の割合はずっと減る傾向が見られる。

写真2はトチノキの木口面の写真である。写真1のケヤキと較べるとずいぶん様子が違うことがわかる。ケヤキに較べるともともと材が柔らかく、耐朽性・保存性もあまりよくない。出土時の保存状態も悪いことが多い。平安時代前期の漆製品にはトチノキ材の使用例はほとんど見られないが、平安時代後期の遺跡である鳥羽離宮跡からはかなりの量が出土している。そのほか、江戸時代になると御土居の外濠から大量に出土している。

写真3はヒノキの木口面である。ヒノキは前の二例とちがい針葉樹で、ろくろ加工が難しいためか出土例は非常に少なく、容器では長岡京跡から出土したものが一例あるほか、平安時代前期の出土品にも一例確認しているに過ぎない。

その他に、漆製品によく使用されている樹種にはクリ・サクラ・カエデなどの落葉広葉樹がある。時代が下がるほどこうした樹種の使用例が増加するようである。